

## ニュース翻訳と日本語教育 松本スタート洋子 (エディンバラ大学)

### 1. はじめに

日本の翻訳市場には大きく「出版」、「実務」、「メディア」に関連する三つの翻訳ジャンルがある(八代・森田・今村 2002 など)。書籍を翻訳する「出版翻訳」とビジネスや産業を支援する「実務翻訳」に加えて「メディア翻訳」では(1)エンターテインメント系コンテンツ(映画、演劇、音楽、ゲームなど)、(2)紙媒体コンテンツ(新聞やコミックなど)、(3)映像メディア系コンテンツ(海外局の配信ニュース、ドキュメンタリー、スポーツなど)を日本語に翻訳して不特定多数の読者や視聴者に向けて発信している。本稿では上記(3)の映像メディア翻訳から海外局配信ニュース番組の英日翻訳(以後「ニュース翻訳」とする)を取り上げ「書き言葉」(翻訳)と「話し言葉」(通訳)の中間に位置するといわれるニュース翻訳を分析し検討する。また日本語教育におけるニュース翻訳の教育利用の可能性についても考察する。

### 2. ニュース翻訳とは

#### 2-1 ニュースの基本構成

ニュース番組といえば、まず短いニュースが連続して次々にトピックが切り替わるタイプとキャスターのニュース読み上げ部分に特派員リポートが続くタイプが思い浮かぶ。前者は「フラッシュ・ニュース」、後者は「パッケージ・ニュース」として知られ(1) LEAD (ニュースの見出しの部分)、(2) BODY (リポートニュース)、(3) STAND UPPER (リポートの結び)、(4) TAG LINE (キャスターによる情報の追加)という基本的な構成を持つ(BS放送通訳グループ 1998)。パッケージ・ニュースの最初に登場するキャスターは(1)のリードで視聴者の関心をひきつけて後続のリポートにつなぐ。(2)では、ニュースに関係する人物の談話の抜粋(interview cut または sound bite と呼ばれる部分)が挿入され、(3)でそのリポートを結ぶ。その後(4)でキャスターが再び登場してコメントを加えたりリポーターに質問(Tag Question)をしたりすることもある。

#### 2-2 ニュース翻訳とその現状

ニュース翻訳者<sup>1</sup>は従来の業務である翻訳に加えて、日本語訳の長さを調整してニュース映像とシンクロナイズさせたり、異文化事情に不案内な視聴者に配慮してキーワードの補足説明を訳文に追加したりするなどの編集業務も翻訳作業の一環として行う(鶴田 1997, 水野 1995)。翻訳者は訳文が完成するとそれをニュース音声として視聴者に伝えることもする。従ってニュース翻訳は「アナウンサーでも会議通訳でもない、まったく新しいジャンルの音声表現」(BS放送通訳グループ 1998: 65)として捉えられており、ニュース翻訳者の条件として一回聞いただけで大体的内容が分かるだけの英語の聴解力、翻訳における日本語表現力、デリバリーでの音声表現力に加えて、自らの判断でニュースの編集を行えるだけの幅広い背景知識があるということが常識となっている。

ここで放送現場での英日ニュース翻訳の現状について簡単にふれておきたい。NHK 衛星第1放送では英米の放送局が配信する英語ニュースの二ヶ国語放送を提供している。ケーブル放送のJCTVではCNN英語チャンネルの8割以上(2006年11月14日現在、筆者調べ)で二ヶ国語放送を行っている。同時通訳(同通)が主流となりつつあるCNNやBBCワールドに対してNHKでは突発事故や大事件を扱うブレーキング・ニュースで速報性が必要となる場合だけ同通に頼り、原則として「時差通訳」体制でのニュース翻訳を行っている(稲生2003)。「時差通訳」とは、事前に入手したニュースのビデオを一定の準備期間内に訳出して生放送の本番中にボイスオーバー<sup>2</sup>をすることを指す。時差通訳式の翻訳では通常1本のニュースに担当時間の10倍くらいの準備時間を見込む(鶴田1997)ということや自然な日本語を優先しているとされる報道方針から、NHKでは時間をかけて訳出する時差通訳の日本語に高いレベルの完成度を期待していることがうかがえる。本稿ではこういった現状を踏まえた上で、TVニュースの翻訳をする必要から生じた「時差通訳」という新しいメディアにおける日本語の表現性の分析、翻訳手法とその教育利用などに関して今後の論を進めていく。

### 2-3 日本語訳の目指すもの

ニュース翻訳者は「通訳者・翻訳者」、「ニュース編集者」、「アナウンサー」の一人三役をこなしているが、放送の現場にいる翻訳者はアナウンサーとの共通点は「テレビで音声を出して情報を伝える」(BS放送通訳グループ1998:57)ことの1点だけで二者間の日本語表現には大きな違いがあると言う。どちらも日本語でニュースを発信しているが、アナウンサーはニュース原稿を読むプロであり、日本語のオリジナル原稿を自分のペースで読み上げているのに対してニュース翻訳者はオリジナルの読み上げペースに合わせて映像を見ながら日本語訳をボイスオーバーする。言い換えれば、ニュース翻訳の日本語表現は「日本語のニュース」というジャンルにおける1つの「バリエーション」とも言える。つまり、この類似する2つのディスコースは表層的には「日本語のニュース」という同一のジャンルに属するが、原文と翻訳という出発点の違いからくる音声表現やディスコースの内部構造の違いを分析すれば様々な違いが見られることが予測されるのである。

しかし、一般視聴者はアナウンサーとニュース翻訳の日本語表現には最初から違いがあるということを意識していない。このため水野(1995)はニュース翻訳を「分かりやすさと情報性の同時的確保」または「視聴者と正確さの重視」という二極間の緊張を持つ翻訳だと分析している。ニュース翻訳の主体は目標言語(日本語)の不特定多数の視聴者に置かれ、翻訳者は情報量と正確さを保ちつつ聞いてわかりやすい日本語を訳出することを目標としている。「聞いてわかりやすい日本語」については『NHK アナウンス・セミナー』(1985)が言及している。TVニュースは一方向性、一過性であるため、視聴者は読み返したり問い返したりすることなく次々に伝えられる情報を受け止めている。そういう状態にある聞き手のためにニュースでは「(文を)短く、簡潔に、大事な言葉を初めに、理由や背景は後から付け加えていく形」(114)をとり、書き言葉的な重い修飾表現は避けるべきだとしている。

### 3. 話し言葉としてのニュース翻訳

#### 3-1 ニュースの読み上げ速度

内容の詰まっている英文ニュースの話しの速度（トーク速度）は分速 180–200 ワードだといわれる。これは通訳者の間で早口として知られるクリントン前大統領<sup>3</sup>でも追いつけないほどの速度である。さらに、一定時間に話せる情報量は英語のほうが多く、日本語は英語に対して6～7割の内容しか話せない（木佐 1993）ことを考え合わせると、1分間に200ワード近いスピードで話している英語のオリジナル映像に合わせて同じ時間内に日本語訳を読むにはかなりの早口で情報を詰め込む必要があることが分かる。早口は「話が文として完結せず、断片的であちこちに飛躍がみられる」、デジカメ（デジタルカメラ）のように「語がだんだんと短縮されやすくなるという傾向」、「ジタカカラ（自宅から）のクが消えてジタツカラと促音化するような母音の脱落傾向」（秋山 1985：73）といった言葉の乱れを誘いやすい傾向もあることから「聞きやすさ」を目指すニュース翻訳者なら早口で読み上げることをできるだけ避けたいに違いない。

このトーク速度と聞きやすさの問題に関して NHK 放送文化研究所が 1996 年に「放送通訳の日本語」に対する視聴者の反応を探索する目的で調査を実施した。その研究報告書を要約した鶴田（1997）によるとニュースのトーク速度の拍数が分速 500 拍を超えると大部分の人が「速すぎる」と感じ、速ければ速いほど聞きやすさが落ちるといことがはっきりと調査結果に現れた（117）。結論としてニュース翻訳のトーク速度は、日本語で NHK ニュースを読み上げるアナウンサーの平均トーク速度と同じで1分間に 465 拍が上限であり、英文ニュースの情報をどこまで訳出するかを指す「適正訳出率」は全訳に対して 86% までという示唆が出されている。この数字は放送現場で7割程度の訳出率を目安としてきた翻訳者の経験的な数字を裏付ける結果ともなった。さらにこの調査の報告では日本語のプロソディに関して同じトーク速度でもマルやテンを区切るタイプの読み上げ方法はゆっくりと聞こえ、間を取らずに一気に読み上げるタイプは「速すぎる」との評価を受けたという。

秋山（1985）も速度と間（ポーズ）には深い関係があると次のように指摘している。一般に人が一息で話す時間は長くて 10 秒から 15 秒ぐらいといわれ、その範囲以内で一かたまりの意味が伝わる。ゆっくり話しているようで多くの内容が伝わる話し方は、一定時間内の物理的な「語数」ではなく同じ時間内にどのくらい「理解できる情報量」があるかが決め手となる（74）。これによれば、ニュースの聞きやすさは単に翻訳終了後の「音声表現力」に関する問題だけ取り上げても本当の解決にならないことを意味していると言えるだろう。つまり早口の問題解決の本質は「音声表現力」以前に訳文の全体構造を意識的に見渡せる「談話（ディスコース）表現力」とでも言うべき言語的センスであり、5W1H や 4W1H（why を抜く）に凝縮される各情報ブロックの意味のつながり（ディスコースの一貫性）や情報提示の順序に配慮した効率的な日本語訳を生み出す翻訳技術にあると考えられるのである。

#### 3-2 話し言葉を意識した翻訳の決まりと手法

まず、話し言葉としてのニュースを意識したとき「だ・である」の使用を避けて「です・

ます」を基調とした文体が使われていることはすぐに気づくことである。次に、音声情報が主体となっているニュースでは、視覚情報は字幕などの画面の文字表示で提示される情報に限られている。従って視聴者は日本語に多い同音異義語を視覚で区別できないので、ニュース翻訳では意図する語が音韻情報から分かる訳語を選ぶ配慮がなされている。例えば、(1) 同音異義語を避けて1回聞いただけですぐわかる言葉を選ぶ(カジツ:[果実・過日]ではなく「先ごろ」を使うなど)、(2) 固有名詞を除いて印刷媒体で使われている言葉(米国, 英国など)の使用を避ける、(3) 聞き間違えることのない数量表現を使う(「約50人」と「150人」の混同を避けるために「約」ではなく「およそ」を使うなど)が翻訳上の決まりとして挙げられる(BS放送通訳グループ1998)。

次にパッケージ・ニュースの翻訳では少なくとも必ず数人(キャスター, リポーター, さらにサウンドバイト内のインタビュー部分に登場する人々)の声を一人の翻訳者がボイスオーバーしている。実際の二カ国語放送を見てみると翻訳者はキャスターの読みニュースとリポーターの語りの部分でそれと分かるほど音声表現を変えることはまずない。そのかわりにポーズを入れることで話者の交代にキューを出す, 画面で人名の文字表示が出ればそれを音声情報に変えて話者の交代を伝えるなどの工夫をしている。また, 誰もが顔を知っている有名な政治家など, 話し手が誰なのかを伝える映像情報に合わせて「ブッシュ大統領はビジネス界における個人責任という新しい倫理を呼びかけると語りました」のように3人称を使ったディスコースを構成してレポート部分との差別化を図る翻訳者もいる。

第三にニュースレポートの本体を構成するサウンドバイトは男女の性差, 世代差, ローカル(方言)とグローバル(米語に対する英語など)の両面から見た地域差, 母語話者による談話かそれとも非母語者の話す英語か, 素人の談話か専門家の談話かなどに関して様々な言語のバラエティーを含む。この多様な様相を示すディスコースの特徴からサウンドバイトの処理は翻訳者によって異なることから, そこに翻訳の差を見ることができる。例えば, 女性市民二人の談話が挿入されているABCニュースのサウンドバイト部分の翻訳(鶴田1997:127-128)を行った5人の翻訳者の性差と引用に関する処理を比較してみると「活気を取り戻すわ」, 「良い気分よ」などの女言葉を使ったのは5人の翻訳者中1人だけだった。残りの4人のうち3人は「活気が戻るでしょう」「いい気分です(ね)」などの性差を区別しない言語表現ではあるが本人になりきる直接話法で訳出し, 最後の1人は「“変化が訪れ, 生き生きするだろう”, という市民の期待の声です」と視点を変えた表現を使っている。メイナード(2005)の言葉を借りれば, この翻訳者は「という」を使って先行する節を独立させることで「従属的ではなくむしろその部分に焦点をあてる」(412)直接引用に似た手法を使ったといえる。

#### 4. 書き言葉としてのニュース翻訳

##### 4-1 公共性に関する語彙の選択

不特定多数の視聴者に向けて発信するニュースの日本語に公共性が必要なことは言うまでもない。この点に関して固有名詞の普通名詞化([宅急便→宅配便], [コカコーラ→コーラ]など)を中立や公正を保つ意味で行う放送局もある。さらに語彙の選択に関して次の2点に関する知識が必要とされる。一つは異文化衝突が顕著な語彙分野で文化の差を取り

除く処理, もう一つは視聴者に不快感を与えないという取り決めのある放送ジャーナリズムの日本語(放送不適格用語)の知識である。以下に順を追ってこの2点を考察する。

まず, 英語ニュースと日本語ニュースでは日付に関する取り扱いが異なる。英語版では日付は *last Monday* などのように曜日であらわすが, 日本語版では「先週の月曜日」といわず, 例えば 16 日などの日付に変更する。同様に距離 [マイル→メートル・キロ], 気温 [華氏→摂氏], 重量 [ポンド→グラム・キロ], 面積 [エーカー→ヘクタール], 天気予報で使われる風速 [マイル→キロ→時速→秒速] なども日本と英米では使う単位が異なるために日本で使用のものに単位換算されている。次に国名に関する扱いに差が出る場合に注意を向けると, 英国の BBC で使われている「ビルマ」は日本語版では「ミャンマー」と変更され, 台湾を *country* とする英語版に対する日本語の対訳は「地域」となる。以上の例が示すように刻々と移り変わる国際情勢を反映するニュース翻訳では国名の対訳ひとつをとっても語彙に流動性があるため注意を必要とする。

次に放送不適格用語の取り扱いに関する翻訳上の決まりについて述べる。日本の活字・放送メディアにおいて性別, 職業, 身分, 地位, 境遇, 信条, 人種, 民族, 地域, 心身の状態, 病気, 身体的特徴などに関して明らかに特定の人間を中傷する差別的表現を使わないという取り決め<sup>4</sup> があることはよく知られている。次の例は左側が差別的とされている用語で矢印の右側がその言い換えである。[めくら→目の不自由な人], [植物人間→意識不明のままの〇〇さん] (心身の障害, 病気), [女中→お手伝いさん→ホームヘルパー] (職業), [エスキモー→イヌイット] (民族), [帰国子女→帰国児童] (性別, 子ども)。ニュース翻訳で注目したいのは差別的とされる用語を含む熟語や慣用句の使用も控えられていることである。このような例に「カーキチ」, 「手落ちがある」<sup>5</sup>, 「(ストで) 足を奪われる」などがある。さらに [ホシ→犯人], [ブージャ→ジャズ] などの隠語や [いまいち→いまひとつ], [ばれる→表ざたになる] を例とする品位にかける用語の使用も避けられる。これらの放送不適格とされる用語や表現はそれほど多くはないが, こういった用語や慣用句をほかの表現に置き換えるとニュアンスが変わってしまう場合もあるので翻訳上の問題点となることも少なくない。

#### 4-2 テロップの定義

テロップとは「映像に文字(字幕)を入れること」と解釈するのが一般的だろう。しかし, 映像に「文字を入れる」ことを「スーパー」, 「(クローズド) キャプション」, 「字幕」, 「サブタイトル」とも言う。そこで, 語彙の定義を先行研究に頼ったが該当する研究がほとんど見当たらなかったため, 本稿では辞書や検索エンジンの使用, 日本および英語圏のテレビ局や放送制作業務関連の企業が提供する情報をもとに関連用語の整理を試みた。「字幕」は映画とテレビ放送の両メディアで使われる。映画の場合の字幕(1)は「サブタイトル」と同義で使われ, 外国語の邦訳を画面に文字表示したものを言う。テレビ放送での字幕(2)は画面だけではわからない人名, 場所, 日時を文字表示した「説明字幕」や翻訳, タイトル, 内容補足などに関する文字情報を指す。「テロップ」とはテレビ放送用に開発された文字や図を挿入する装置 (TELEvision Opaque Projector) の略称。転じてこの装置による字幕や絵もテロップと呼ぶ。「スーパー」とは映像メディアで使われる技術の1つである「ス

「スーパーインポーズ」の略。転じて複数のイメージ、映像、図と文字を重ねたものを指し、字幕を入れることも含む。「クローズドキャプション (CC)」は聴覚障害向けに開発された特殊な字幕を指す。CC は雑音や音楽などの会話以外の背景音声も含む音声のトランスクリプトで、それを文字情報としてテレビ画面に表示・非表示が選択できる。

以上をまとめるとキーワードである「字幕」は上記の用語の全てに使われている。しかし、映像メディアの違いや誰に向けて発信しているかによって「字幕」の伝える情報には多様なジャンルがある。そのうち聴覚障害用の CC と映画の邦訳であるサブタイトルは本稿の扱う枠外であることから、本稿では「テロップ」と「スーパー」を同義語として扱い、「テロップ」として統一する。次に、本稿でいう「テロップ」とは映像情報に加えて (1) 人名・場所・日時, (2) タイトル (見出し) (3) 内容補足, (4) 内容サマリーのいずれかについての「字幕」を含む英日翻訳テキストを指すこととする。

#### 4-3 テロップ翻訳の決まりと手法

これまでに述べた話し言葉に関するニュース翻訳と異なり、テロップは目で読むための書き言葉の翻訳である。言葉のジャンルは違うが、この2つには「時間制限」という共通点もある。つまり、音声情報と同様にテロップも一過性であるという特徴を持つため、視聴者はテロップが消える前に文字情報をプロセスして理解しなければならない。従ってテロップ制作には短時間で文字認識ができるような工夫がされ、基本的に1枚ごとに完結するという決まりがある。しかし、筆者の知る限りテロップ制作者の手法は明文化されていないことが多く、テロップ翻訳に関する資料も乏しい。そこで本稿では筆者が行った関連調査<sup>6</sup>とテロップに比べると広く公開されている映画字幕の手法を考慮してテロップ翻訳の決まりと手法について述べることにする。

一般的に字幕は1秒に4文字を原則としているが、これは人が1秒間に読める文字情報が4文字強とされていることによる。テロップにつきものの字数制限内で読みやすい日本語表現を工夫することがテロップ翻訳の大きな特徴となっている。テロップ翻訳に必要な決まりは以下の通りである。

- 1) 英語 10 秒につきテロップ 1 枚を目安とする。5 秒の場合は 0.5 枚が目安。
- 2) テロップ 1 枚は横書きの場合で 15 字 (+1 字) × 2 行の最大 32 字、縦書きの場合は 11 字 (+1 字) × 2 行の最大 24 字を原則とする。
- 3) 1 枚のテロップに収まらない場合は 2 枚までを限度として続けてもよい。その場合は 1 枚目のテロップの最後に「—」(リーダーケイ) を必ずつけて 2 枚目につなぐ。
- 4) 単語の途中や括弧や引用符にくくられた文の途中では改行しない。
- 5) 表記:
  - A) 文体は原則的に「だ・である」を基調とする。番組デスクの指示があれば「です・ます」に変更する。
  - B) テロップには句読点は使わない。「」, 「・」, 「?」, 「—」は使ってもよい。原稿用紙ではマルの分を 1 字(全角)あけて書く。
  - C) 数字は原則的に算用数字を使う。5 桁以上は算用数字と漢数字を混用 (e.g. 7 万

5000) し、年号は算用数字 (e.g.2006 年) を使う。

- D) 漢字使用は原則として常用漢字を主とする。しかし、使用不可の漢字 (e.g.今年 → ことし, 誰 → だれ, 真摯 → 真し) もあるので現場では用語辞典<sup>7</sup> を参照する。
- E) 固有名詞 (人名, 地名) は原則として省略しない。

ここでテロップの手法について述べてみたい。まず、読みやすい表記の選択についての 5) -D) に沿ったテロップでも漢字が続くと読みづらくなる。その場合は、常用漢字の範囲内であっても翻訳者の判断で平仮名に開いて読みやすく工夫する。同様に平仮名ばかりが続いて読みにくいと判断すれば意識的に漢字にすることもある。片仮名表記の人名などはそのまま使うが、[ターゲット→標的] のように片仮名語を漢字で書けば字数を減らすことができる。プロの翻訳者は与えられた表示時間または字数制限で「読みやすい」日本語表現を工夫しているが、なかでも改行の手法は重要である。例えば、上記の 4) に加えて改行は意味の切れ目で行う。さらに、語順や 2 行の長さのバランス (切れ目) を工夫することで目に入りやすく読む人を疲れさせないテロップができると言われている。次の英文を例として下の 2 つの訳文を考察してみよう。 *The UN relief agency estimates that three-hundred thousand refugees have left Rwanda.*

1) 国連援助機関は 30 万人の難民がルワンダを脱出したと推定した (28 文字)

- |                                     |                                     |
|-------------------------------------|-------------------------------------|
| 1-a 国連援助機関は 30 万人の難民がルワンダを脱出したと推定した | 1-b 国連援助機関は 30 万人の難民がルワンダを脱出したと推定した |
|-------------------------------------|-------------------------------------|

2) 国連援助機関の推定では 30 万人の難民がルワンダを脱出した (27 文字)

- |                                    |                                    |
|------------------------------------|------------------------------------|
| 2-a 国連援助機関の推定では 30 万人の難民がルワンダを脱出した | 2-b 国連援助機関の推定では 30 万人の難民がルワンダを脱出した |
|------------------------------------|------------------------------------|

読みやすさのランクをつけるとすれば 1-a < 2-a < 1-b < 2-b となるだろう。1-a は単語 [ルワンダ] の途中で改行が行われているため非常に読みづらい。2-a では 1 つの意味のチャック [30 万人の難民] が改行によって途切れている。1-b が 2-b より劣るのは、主語 [国連援助機関] と述部 [推定した] が離れすぎていて聞き手のプロセスに余分な負荷がかかるためである。一番読みやすい 2-b は各行で意味が完結しており、テロップの流れに従って瞬時に意味が理解できるような語順となっている。以上に加えてテロップ翻訳では、読み違いが生じないようにガーデンパス文 (袋小路文) に見られる曖昧な文を避ける配慮が必要である。例えば「信号を無視して走ってきた対向車と衝突した」という文から (1) 「対向車と衝突した人が信号を無視した」と (2) 「衝突した対向車が信号を無視した」の二通りの解釈ができる。しかし、(1) を「信号無視で対向車に衝突」に、(2) を「信号無視の対向車と衝突」と表現を少し変えることで曖昧さを取り除くことができる。

## 5. ニュース翻訳で学ぶ日本語

日本の通訳教育の実情を調査した染谷（2004）は「日本における通訳者教育は、多くの場合「通訳技能の習得」と「語学学習」という2つの側面を同時に併せ持っており、通常は後者により多くの比重を置かざるを得ないというのが実情」（199）だと述べている。さらに「現場の講師は、一方で生徒に通訳そのものの訓練を施しながら、もう一方で、いかにして生徒の語学力を効果的な通訳訓練が可能になるレベルにまで引き上げていくかという矛盾した課題を背負いながら指導に当たっている」という通訳教育の問題点にふれている。これは日本語学習者に対する英日翻訳教育にも言えることであろう。英語から外国語である日本語への翻訳で最大の課題は目標言語である日本語をどう表現するかにある。日本語を習得中の日本語学習者への英日翻訳の実践指導において、翻訳技術を学ぶことが日本語能力を向上させることに役立つような教材開発が望まれるのである。

ここでニュース翻訳がなぜ日本語学習者向きの翻訳テキストなのかということを考えてみたい。まず基本的なことだがニュースは「です・ます」を基調としたスタイルで翻訳することを原則としている。つまり、ニュース翻訳の文体は1つと決まっているので日本語学習者は文末表現に関しては確信を持って翻訳に望むことができる。次に、ニュース翻訳では無駄な言い換えや要約（いわゆる丸めた訳）、適当な省略や必要のない意識を避けることが良いとされる（BS放送通訳グループ 1998）ので、これらのこなれた日本語表現を使わずに訳出するニュースの翻訳は、日本語が母語ではない翻訳者にとって取り組みやすいタイプのテキストだと言える。同様にニュースでは、外国語を習得中の学習者にとって理解が難しいと言われる比喩やイディオム、同音異義語の駄じゃれ（puns）や格言などの難度が高い翻訳アイテムはあまり使われない。これは学習者のレベルにあった翻訳演習用のテキストを探す教師の助けとなる。また、テロップの手法には読みやすい日本語表記の選択についてのノウハウが詰まっている。例えばカタカナ語の漢字熟語への言い換え練習をテロップ制作の一環として演習すれば、学習者は実践を通して表記の工夫を学ぶことができるだろう。最後に異文化理解という観点からニュース翻訳を見てみると、英語ニュースで日本人が分からない部分はどこなのかを見極め、それに補足説明をつけるには翻訳者の持つ日本や日本文化に対する背景知識の有無がものをいう。日本語学習者がニュース翻訳を通して文化が言語に体现されていることに気づいたとき、翻訳は辞書をひいて言葉を置き換えるだけの作業ではないことを実感できるだろう。

## 6. おわりに

本稿ではニュース翻訳をする必要から生じた「時差通訳」という新しいメディアにおける日本語の「話し言葉」と「書き言葉」の両面から分析を試みた。今後の課題として、ニュース翻訳を日本語教育の一環として導入するための教材開発を目指したい。現在、パイロット教材を使用して日本語学習者が翻訳したニュース翻訳文の特徴を分析中であり、これと平行して英日翻訳ニュースの映像・音声・言語情報を含む大規模な資料収集と分析を予定している。



## 注

- 1 TV ニュースの翻訳者は通常「放送通訳者」と呼ばれる。翻訳に焦点を置く本稿では「ニュース翻訳者」と呼ぶが、引用部分などで「放送通訳者」に言及している場合は原文を尊重して「放送通訳者」をそのまま使用する。
- 2 英語の音声を生かしたままで日本語の音声をかぶせるように入れていく手法。
- 3 大統領就任演説から無作為に1分間の発話を4ヶ所（スピーチの出だし、中盤2ヶ所、終盤）取り出して調べた。最速トーク速度は146ワードだった。
- 4 通信社、新聞社などで出版している「記者ハンドブック」や「新聞の用語集」に差別語や不快用語に関する詳述がある。
- 5 筆者がニュース翻訳現場で調査を行った折に“片手落ち”とともに“手落ち”も不適切表現です。“落ち度”はOK」という語彙使用の確認に関する張り紙を目にしている。
- 6 本稿のテロップ翻訳上の決まりと手法についての記述は、筆者が2006年5月に行った関連調査において（株）NHK情報ネットワーク パイリンガルセンター国際研修室の「プロ放送通訳者・翻訳者コース」で「放送通訳 I」を担当する山崎智子氏提供の資料を参照した。なお、本文中で分析に使用した例文は全て筆者のオリジナルである。
- 7 例えばNHKは『NHK 新用字用語辞典』（NHK放送文化研究所編）を出版、NTVは一部分をウェブ上で公開中（[http://www.ntvart.co.jp/03\\_bus/04\\_oag/01\\_what\\_telop.html](http://www.ntvart.co.jp/03_bus/04_oag/01_what_telop.html)）。

## 参考文献

1. 秋山和平（1985）「ことばの基礎」『NHK アナウンス・セミナー』日本放送出版協会
2. 稲生衣代（2003）「放送通訳の変遷と通訳・翻訳手法に関する考察—CNN二ヶ国語放送を例に」『通訳研究』第3号 pp54-69.
3. 木佐敬久（1993）「同時通訳の日本語 視聴者はどう受けとめているか」『放送研究と調査』1993年3月号 pp.28-39.
4. 染谷泰正（2004）「通訳訓練手法とその一般語学学習への応用について」『通訳理論研究論集』, JAIS 2004, pp199-216)
5. 鶴田智佳子（1997）「英語テレビニュースの放送通訳 - あるABCニュースに関する一考察」『目白学園女子短期大学紀要』第34号 pp.115-133
6. BS放送通訳グループ（1998）『放送通訳の世界』アルク新書8
7. 水野的（1995）「放送通訳講義」 [online] <http://akasaka.cool.ne.jp/kakeru3/bs0.html>
8. メイナード泉子・K（2005）『[日本語教育の現場で使える] 談話表現ハンドブック』
9. 八代登志江・森田政幸・今村美香編（2002）『マスコミの通訳者・翻訳者になる本』イカロス出版